



第34回日本エイズ学会学術集会・総会

共催 シンポジウム 5

## 積み重なるTAFのエビデンス ～TAF containing regimenの臨床的意義～

ライブ1

日時

2020年11月29日(日)  
13:50～15:20

座長

**松下 修三** 先生

熊本大学 ヒトレトロウイルス学共同研究センター

Rationale for FTC/TAF-Based STRs

演者

**Martin Rhee, MD**

Clinical Research, Gilead Sciences, Inc.

TAFの臨床的意義 ～耐性・HBVの観点から～

演者

**湯永 博之** 先生

国立国際医療研究センター エイズ治療・研究開発センター

---

# 積み重なるTAFのエビデンス

## ～TAF containing regimenの臨床的意義～

---

核酸系逆転写酵素阻害剤(NRTI)としてテノホビル アラフェナミド(TAF) フマル酸塩を含有する製剤は、本邦では2016年にゲンボイヤ® 配合錠として承認されて以降、複数の製剤が承認を受けている。「バックボーン」としてTAF/エムトリシタビン(FTC)のNRTI2剤を含むレジメンは、国内外のガイドラインにおいて、初回治療の推奨レジメンとして位置付けられており、多くの国でTAF/FTCを含むレジメンの使用経験が蓄積されつつある。HIV陽性者は長期に渡って抗HIV薬の服薬を継続する必要があることから、このTAFの長期的な有効性・安全性についてはHIV治療にあたる医療従事者や、HIV陽性者にとって非常に重要な情報であると考えられる。

本シンポジウム前半においては、TAF/FTC含有レジメンでの積み重ねられた有効性・安全性について概括する予定である。特に安全性については、テノホビル ジソプロキシシルフマル酸塩(TDF)の際に懸念された、腎臓や骨に対する影響や近年注目されている体重の変化に対する影響についても現在得られている知見を紹介したい。

シンポジウム後半においては、HIVの長期に及ぶ治療を成功させるにあたってのTAF含有レジメンの臨床的意義について述べる予定である。主に薬剤耐性変異やHIV/HBV重複感染の観点から、TAFが果たす役割について現在得られているエビデンスから検討する。